



もうすぐ出会う友達に思いをはせて



先日、大学3年生の卒業生からの誘いをうけ、バレーボールの試合を見にいってきました。彼女が高校生だった当時、私は部活の顧問ではありませんでしたが、彼女の担任でした。彼女からもらったメッセージは、「先生、卒業式の日に私の大学の試合を見に行きたいと言って下さったの覚えていますか?」とはじまり、私が見に行けるような場所や時期などを考え、声をかけてくれたことがわかりました。部員は多くはないですが少数精鋭で、素晴らしい試合でした。

彼女のチームには、文系・理系様々な学部に所属する選手がおり、他県から来た人はもちろん、別の高校には進んだけれど、小中学校で一緒にプレイしていた後輩もいました。なかには、長く空手をやっていたという初心者のプレイヤーもいましたが、とても上手でチームに大いに貢献していました。

高校3年生は大学入学共通テストまであと100日をきりました。先週発表された出願者は約46万5千人。多治見高校の約180人でワンフロアだとすれば、受験者全員集めて一緒に勉強しようとなると2583階建てのビルをたてなければなりません。それだけ多くの受験者が、喜んだり、落ち込んだり、励まし合いながら頑張っています。

そんなに高いビルの中には、将来一緒にスポーツをしたり、アルバイトをしたり、恋人や家族になる人が含まれていてもおかしくはないですね。10月は模試が続きますが、大事なことはこれが本番ではないということです。できないことが見つかることは悪い事ではありません。しっかりと見直して弱点を淡々とつづしていくのみです。

もうすぐ出会う友達に思いをはせて、今日も一日頑張りましょう。今が苦しいほど、未来の友人と一緒に語れるネタは増えています。来年の今頃、あなたとそんな話をしている相手を想像してもう一步進んでみましょう。(文責:桑原)

♪3年の窓♪ ～勉強とは?～ 3年生の皆さんに考えてほしいこと(数学っぽい話を添えて)

「勉強は好きですか。」という問いに「はい」と答えられる人がどれだけいるかは分かりませんが、そんなに多くはないのではないのでしょうか。一方で、「勉強は必要ですか。」という問いには、ほとんどの人が「はい。」と答えるのではないのでしょうか。では、勉強はなぜ必要なのでしょう。「受験に必要だから。」という声が聞こえてきそうですが、今回はそれについて数学っぽい話を例として考えてもらいたいと思います。

皆さんはゲーデルという数学者をご存じですか。「ゲーデルの不完全性定理」というとても有名な定理があります。これを説明するときによく例として用いられるのが「嘘つきのパラドックス」です。「私はいつも嘘をつく」という人がいたとして、これが本当なら「いつも嘘をつくのにはここでは本当のことをいっているため」おかしくなり、嘘なら「いつも嘘をつくなら、これが嘘なのでいつも本当のことをいう」と言わねばならないためこれもまたおかしくなる。では、今この例を見て、「ゲーデルの不完全性定理」を理解したと言えるでしょうか。当然ながら、それは違います。分かりやすく説明した例を見ただけで、全く本質には近づいていないのです。つまり、「ゲーデルの不完全性定理」というものを理解したければ、それを分かりやすくした例に触れてもあまり意味がないのです。

では、改めて勉強とはなんでしょうか。私は、「物事を理解するために必要な知識や考え方を身につけること」が勉強だと思っています。「ゲーデルの不完全性定理」を理解するには、ただそれだけを考えていても駄目で、それに関する基本的な知識・考え方を積み上げていく必要があります。では、今皆さんはどのように勉強をしていますか。「受験に必要だから。」という風に考えて、問題の解き方やテクニックを学ぶことに終始していると、表面的な勉強しかできません。残念ながらそのような勉強法では、模試や本番の入試で力を発揮することはできません。これから3~4か月という短い期間で、どれだけ勉強できるかは分かりませんが、「何故そうなるか説明できますか?」ということを常に意識して、勉強していきましょう。

なお、私の授業を受けている生徒には時々言っているのですが、私は数学が嫌いです。しかし、「好き嫌い」と「必要不必要」には全く関係がありませんので、「好き嫌いに関わらず」勉強を頑張ってください。(文責:水口)

『2年の窓』 探究ゼミについての試論 ～プラグマティズム と Go!プリンセスプリキュア～

探究ゼミ中間発表が近づいている。担当者としては触れないわけにはいかない。前回取り上げたデカルトの批判を展開したプラグマティズムについて触れ、またアニメーション作品（2015年放映、2022年視聴）に託けて論じてみたい。

デカルトは方法的懐疑の末に、「考える私（理性）」を哲学の第一原理として、客観的な「真理」の探究に臨んだ。だが、同じく科学的方法を基盤としながら、プラグマティズムの祖であるパースは、「真理」を「探究の共同体という理念的な組織を考へて、そこでの探究の無制限な継続の果てに、無限の過程の収束点として考えられるような、最終的信念のこと」（伊藤、2016、p63）と規定して、その客観性を疑ったのである。また、「探究はわれわれの生活における疑問や困惑から出発する。何かが混乱していて不分明であり、『不確定』であるために、はっきりとした行動の指針が立てられない。この不確定な状況を『構成している区別や関係』が確定した状況へと『転化』させること、これが探究である。探究はつまり、状況への介入や操作を通じた転化の作業である。」（伊藤、2016、p104）後継者であるデューイは、探究を以上のように表現した。

もはや私の言葉は不要かもしれないが（それでも、自ら言葉を紡ぐ努力が必要だと哲学は教えてくれる）、探究ゼミにおける「問い」「答え」が、皆さんの興味関心から生じたものであること、「完璧」を求めることは大切だが、それは決して「完璧」なものでなくても良いことを伝えたい。中間発表であれば猶更である。誰もが「納得」する客観的「真理」ではなく、あなたが「納得」できる「信念」に届きうるために研究を進めて欲しい（これは学習にも通ずるところだ）。なおこの辺りは、もう一人の祖、ジェームズに詳しい。参考文献を参照せよ。◎伊藤邦武『プラグマティズム入門』（ちくま新書、2016）

表題のアニメは、「プリンセスになる」という「夢」を叶えるため、「プリンセスとは何か」という「問い」と向き合うシリーズ第11作。絶望と闘う中で成長する主人公たちの様子が緻密に描かれる。「答え」を見つける熱い終盤戦、その後の寂寥感から個人的最高傑作の1つとしたい。「夢」に向き合う高校生にこそ見て欲しい。「お覚悟はよろしくて？」（文責：奥田）

『1年の窓』 何が書いてあるかではなくて、どう書かれているか

私は書道部の顧問に長年携わってきて、作品の臨書（評価の定まった古典作品をまねて書くこと）を指導する際にいつも部員たちに言う言葉があります。「何が書いてあるかではなくて、どう書いてあるかを観察することが大切。」ということです。人は、見ているつもりで、見落としていることがいかに多いかということに関する問いかけです。「みている」と一言で言っても、どのように「みている」のかは人によって実に様々だと感じます。目に映る情報をどれだけたくさん正確にキャッチできるのか、これは鍛錬を重ねないと難しいのではないのでしょうか。臨書でなくても、お手本をまねるときに必要な要素としてざっと主な物をあげると、「線の長さ・太さ・方向・交わる位置・打ち込みの角度・偏と傍の配置・点画と点画の間隔・周りの余白」等々、線を引き始める前、引いている最中常に意識しています。これが臨書となると、「線質を表現するための用筆法、運筆法、墨量の変化」等さらに細かな要素が加わります。学び初めは、目の付け所がわからず、ただ書いてある文字を自分の字で書くことが精一杯だと思います。しかし、文字を形作る要素としてどのような物があるのかということを知っていく中で、どこに着目すれば良いのかということを知れば、獲得する情報量も増えていきます。実は、書道の上達において一番大切なのは実際に書いているときの筆の動きの観察ができるかどうかという点です。書道というと、お手本を見て書く学習が一般的だと理解されがちですが、全くの初心者が既に書かれているお手本を見てもおそらく筆の使い方を想像して書くことは困難です。先生がどう書くのか、筆の動きとともに観察して、初めて文字の形（線の形）と筆の働かせ方が一致します。表現によって筆の働かせ方は変化するため、線の種類ごとにそれを確認する必要があります。目からの情報量が増えれば増えるほど、上達していきます。また、初めて目にする線に出会ったときに筆の働かせ方が想像できるようになります。これが本当に技術を獲得した状態で、応用力がついたということにもなります。

さて、先日前期期末考査が終わったところですが、学習の話についても同じ事がいえるのではないのでしょうか。学習における要点とは、大切な情報を見落とさないということにあると思います。ただ、教科書に書かれている内容を漠然とおっていても、本当に大切な部分を見落としてはいつまでたっても本丸には到達できません。膨大な情報の中から、本当に大切な部分をしっかりとつかみ取り、活用する力を得るためにはどうしたらいいのか一度考えてみてもらいたいです。

みなさんは普段どのような姿勢で授業に臨んでいるのでしょうか。一度自分の普段の授業での取り組みを振り返ってもらいたいのではないかと思います。それぞれが授業に参加していることは間違いのないでしょう。ただ、その参加の仕方が自分に学力をつける上で最適かどうかという視点で、今一度自分に問いかけてみるのも有効ではないかと思う次第です。

（文責：紀平）